

古代山城は完成していたのか

亀田 修一（岡山理科大学教授）

1. はじめに

日本列島で確認されている古代山城には朝鮮式山城と呼ばれているもの、神籠石系山城と呼ばれているものがある。前者は『日本書紀』や『続日本紀』などの記録にみられるもので、後者はその本来の名前は分からないが、列石を伴う城壁や水門の遺構などから古代の山城と考えられているものである。特に後者に関しては、土塁前面下部の列石が大きな特徴として認識されている。ただ、近年の発掘調査の進展によって、両者が基本的に同じ構造物であることが認識され、古代山城として同じように扱うべきであるという考えが増え、新規に発見される「神籠石」も「・・・山城」「・・・城」と名付けられるようになっていく。

朝鮮式山城に関しては、前述のように『日本書紀』などにその築城・修築記事がある。天智天皇 2 (663) 年の白村江の戦いにおける敗戦、百済からの多くの人々の日本列島への亡命、唐・新羅が日本列島へ攻めてくるのではないかとという危機感などから、天智天皇 3 (664) 年福岡県太宰府市などに水城が築かれる。そして翌天智天皇 4 (665) 年、長門国の城、筑紫国の大野城・椋城が百済からの亡命貴族（将軍）達率答・春初、達率憶禮福留・達率四比福夫らによって築かれる。さらに天智天皇 6 (667) 年、倭国の高安城、讃吉国山田郡の屋嶋城、対馬国の金田城が築かれる。そして文武天皇 2 (698) 年、大宰府に大野・基肆・鞠智の 3 つの城を繕治させている⁽¹⁾。

このように記録にみられ、かつその所在地がおおよそ確認されている朝鮮式山城は 6 ヶ所、記録にみられない神籠石系山城は 16 ヶ所、合計 22 ヶ所の古代山城が確認されている。これらの古代山城の調査・研究はそれぞれ進展状況に違いはあるものの、それなりに進んでおり、その内容についても徐々に明らかになりつつある。

そのようななかで、城壁が推測される場所で確認できず、もともと築かれていなかった、未完成であったのではないかと推測される山城の存在が改めて知られるようになってきた。このような指摘はすでに筑後女山神籠石や讃岐城山城跡などに関して指摘されていたが（石松 1976・松本 1976・佐田 1982 など）、近年単に未完成なのではなく、「見せる城」という考えで、見える部分だけ築こうとしたという考えも提示されるようになってきている（向井 2010 a・b）。

小稿ではこのような広義の「未完成の城」について検討するとともに、「完成した城」と「未完成の城」の意味について改めて検討してみたい。

2. 完成していたと思われる古代山城

これまでの発掘調査などによって城壁がほぼめぐらされていたと思われる山城は筑前大野城跡、肥前基肆城跡、対馬金田城跡、肥後鞠智城跡、備中鬼ノ城、豊前御所ヶ谷神籠石などである。

(1) 筑前大野城跡

筑前大野城跡は福岡県大野城市・太宰府市・宇美町に位置する（鏡山 1968、入佐・小澤編 2010 など）。最高所標高 410m の四王寺山の峰々に土塁をめぐらせており、南北で部分的に二重になり、城周は約 6.8km である。

大野城に関しては、『日本書紀』天智天皇 4 (665) 年 8 月条に百済の達率憶禮福留と達率四比福夫が

基肄城とともに築かれたことが記されている。そして『続日本紀』文武天皇 2(698)年 5 月甲申条に「大宰府に命じて、大野・基肄・鞠智の三城を繕治(修理)させた」とあり、築城から 33 年で修理させていることがわかる。

(2) 肥前基肄城跡

肥前基肄城跡は佐賀県基山町と福岡県筑紫野市にまたがる古代山城で、標高 404m の基山から東に傾斜する地形を利用して土塁がぐるりとめぐらされており、城周は約 3.9km である(鏡山 1968、田平 1983、小田 2009・2011 など)。城内最高所は標高 414m である。

基肄城に関しても大野城と同じように、『日本書紀』天智天皇 4(665)年 8 月条に百済の達率憶禮福留と達率四比福夫が大野城とともに築いたことが記されている。そしてこれも同じく『続日本紀』文武天皇 2(698)年 5 月甲申条に「大宰府に命じて、大野・基肄・鞠智の三城を繕治(修理)させた」とあり、築城から 33 年で修理させていることがわかる。

直接的に築城などに関わるものではないが、『万葉集』にもその名前が見える。巻 8-1472 は式部大輔石上堅魚朝臣の歌であるが、その左注に、神亀 5(728)年石上堅魚が大宰師大伴卿の妻大伴郎女の死に際して大宰府に行き、役目が終わった後に駆使や府の諸卿大夫たちと「記夷城」に登って望遊して詠んだと記されている。

そして、大宰府政庁跡南側の不丁地区官衙遺跡において天平年間(729~748 年)ころと推測される木簡が出土している。木簡には「為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稻穀随大監正六位上田中朝□□」とあり、基肄城に貯蔵されていた稻穀が筑前・筑後・肥の国に運ばれたことがわかる(九州歴史資料館 1987)。また『日本紀略』弘仁 4(813)年条に「基肄団」(基肄軍団)の記録が見られる。

(3) 対馬金田城跡

対馬金田城跡は長崎県対馬市美津島町黒瀬および箕形に位置する(田中・古門編 2000・2003、田中編 2008・2011、亀田 2012 など)。標高 276.2m の城山を最高所として東に下がる斜面部に石塁がめぐらされている。城壁は石塁で全周しており、城周約 2.8km である。

『日本書紀』天智天皇 6(667)年 11 月条に、倭国高安城、讃吉国山田郡屋嶋城とともに築かれたことが記されている。金田城に関わる記録はこれだけで、築城後の城の様子などはわかっていない。

(4) 肥後鞠智城跡

肥後鞠智城跡は熊本県北部の山鹿市と菊池市またがって位置している(西住ほか編 2012 など)。海岸線からはやや離れており、菊池平野を南に望む標高 145m の米原台地を中心に築かれている。城壁は土塁と急な崖を利用したもので、城周約 3.5km の土城である。

築城に関しては記事が見られないので正確な年代はわかっていない。鞠智城が文献に初めてみられるのは、前述の大野城・基肄城とともに繕治させるという『続日本紀』文武天皇 2(698)年の記事である。その後奈良時代の記録はなく、『日本文徳天皇実録』天安 2(858)年閏 2 月丙辰(24 日)条に、菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴り、同丁巳(25 日)条に、また鳴ったとあり、同 6 月己酉条に菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴り、その不動倉 11 宇が火事になったと記されている。そして『日本三代実録』元慶 3(879)年 3 月 16 日条にも肥後国菊池郡城院の兵庫の戸が自らなつたと記されている。これ以後の記録は見られない。

(5) 備中鬼ノ城

備中鬼ノ城は岡山県総社市奥坂に所在する鬼城山(標高 396.6m)に位置する(高橋 1976、鬼ノ城学術調査団 1980、総社市教育委員会 2005、村上・松尾 2005、松尾・谷山 2006、岡田・亀山 2006、金田・

岡本 2013)。南に下がる斜面部に基本的に土塁で築かれ、城周は 2790m である。この山城に関する古代の記録はない。

城壁は基本的に版築の土塁で築かれているが、一部石塁で築かれており、一般的な印象としては石城のイメージが強いようである。城壁は全周しており、城門が 4 ヲ所、通水口をもつ水門が 5 ヲ所、城内に礎石建物が 7 棟、土手を持つ貯水施設が 2 ヲ所確認されている。

(6) 豊前御所ヶ谷神籠石

豊前御所ヶ谷神籠石は、福岡県行橋市とみやこ町にまたがり、標高 246.9m の御所ヶ岳（ホトギ山）から西に延びる尾根線と北に延びる斜面を取り囲んで築かれている（小川 2006・2010 など）。城周は約 3030m である。文献に関連記事は確認されていない。基本的に基部に列石を配した土塁で囲まれている。

(7) その他

以上、述べてきたもののほかに完成していたのではないかと考えられているものとして、備前大廻小廻山城がある。少なくとも城壁線（土塁・列石）は全周していると考えられている（出宮・乗岡 1989）。ただ、西側の門が想定される一木戸北側は発掘調査を行ったが、現在の山道で削られているようで、門の痕跡は確認できていない。また伊予永納山城も完成した城と考えられているが、残りの悪い部分では本来どのような状況であったのかは確認できない（渡邊・半沢 2005、渡邊編 2009、渡邊 2012）。

3. 未完成の可能性のある古代山城

(1) 豊前唐原山城跡

唐原山城跡は福岡県築上郡上毛町下唐原・土佐井に位置し、標高 83.5m を最高所とする低丘陵に築かれている（末永 2003・2005）。城周約 1700m と推測されている。この山城に関する古代の記録はない。

土塁・列石に関しては、基本的に土塁はなく、北東側は土塁・列石を配するための加工がなされるのみで、南西部はそれすら明確でない。南側などで点的に並ぶ列石が城壁想定線の各所で確認されている。このように城壁は明らかに未完成である。

(2) 筑前阿志岐城跡

阿志岐城跡は福岡県筑紫野市阿志岐に位置する標高 338.9m の宮地岳北西側山腹に築かれている（草場編 2008・2011）。城周は約 3.68km と推定されている。『日本書紀』などにその記録は確認されていない。

城跡は列石を持つ土塁、石塁、3 ヲ所の水門などが確認され、北東面側は第 3 水門までは土塁は確認できるが、その南側では確認できず、北西側では最も西側に突出した標高約 200m 地点近くまでは確認できるが、そこから南側に関しては確認できていない。このように城壁は全周していないと考えられている。

(3) 筑前鹿毛馬神籠石

鹿毛馬神籠石は福岡県飯塚市鹿毛馬、標高約 75m の低丘陵部に築かれている（井上・宮小路 1984、須原 1998）。城周約 2km である。この山城に関する古代の記録はない。

城跡は最高所の丘陵東側を起点として西側に三角形に下がりながら広がる、土塁で囲まれたものである。城壁線は基本的に切石列石を伴う土塁で築かれているが、東側山頂付近では約 300m 列石が確認できない。

(4) 筑後女山神籠石

女山神籠石は福岡県みやま市瀬高町大草女山の標高 203.6m を最高所とする西向き丘陵部に位置し、

城周約 3km と推定されている（石松 1976、磯村 1978、川述 1982、猿渡 2013）。この山城に関する記録は確認されていない。

東側の最高所から西側斜面に沿って扇状に広がる尾根部と西側標高 40～45m の山腹に列石や土塁が確認され、水門が 4 ヲ所確認されている。ただ、正確にはこの東側山頂部のすぐ東側から北側と西面土塁線の最も北側に位置する粥餅谷水門の間は、地形によって城壁線が推測されているが、その場所には土塁・列石は未確認で、昭和 46 年の福岡県教育委員会による発掘調査でも 10 ヲ所ほどのトレンチを入れ、確認したが、土塁・列石は確認できていない。つまり西面土塁線の最も北側に位置する粥餅谷水門から南側は土塁・列石が確認されているが、その北側は未確認なのである。

(5) 肥前おつぼ山神籠石

おつぼ山神籠石は佐賀県武雄市橘町大日のおつぼ山に位置する（鏡山ほか 1965、武雄市教育委員会 2011）。城内のほぼ中央部に位置する標高 66.1m 地点を最高所として、土塁・石塁が確認され、城周は 1870m ある。この山城に関する古代の記録は確認されていない。

おつぼ山神籠石の土塁・列石は想定されるすべての場所では確認されていない。昭和 38 年に発掘調査がなされているが、第 2 土塁とよばれる北東部の土塁から東側の東門、南東部の第 1 水門、南門を経て城壁南端付近までは基本的に土塁・列石は残っている。しかし、推定城壁線の西側に関しては、第 2 水門、そのやや西北側の一部で土塁・列石が確認できるが、それ以外の場所では点的に列石などを確認できる程度（第 8 図 5 の○で囲った点）であり、少なくとも城壁線が全周していることはない。また、東門の外側に加工された石材がまとまって点在している。

(6) 播磨城山城跡

播磨城山城跡は兵庫県たつの市新宮町馬立などに所在する標高 458m の城山を中心に築かれている（加藤ほか 1988、加藤 1995）。土塁などの城壁は確認されていないが、約 1600m の城周が想定されている。この城に関する古代の記録はない。

遺構・遺物としては方形竪り込みの唐居敷、塊石を使用した谷部の石塁、そして礎石建物（4×7 間）などが確認されている（加藤ほか 1988）。ただ、唐居敷（第 9 図 2）には軸摺穴が開けられておらず、未完成と考えられる。

(4) その他

以上述べてきたもののほか、筑前杷木神籠石は土塁・列石が明確でない部分があり（宮小路ほか 1970）、筑後高良山神籠石も北側の城壁線はよくわかっていない（第 8 図 8）。ただ、これに関しては天武天皇 7（678）年の地震によって壊れた可能性が提示されている（松村 1990・1994）。

このほかに、周防石城山神籠石は想定される城壁線において土塁・列石などが確認できていない部分があり（第 8 図 7）、少なくとも方形削込みを持つ唐居敷は軸摺穴が彫られておらず（第 9 図 3）、未完成の可能性が考えられる（小野 1983、光市教育委員会 2011）。同様に讃岐城山城跡も方形削込みを持つ唐居敷が確認されているが、方立用の穴と軸摺用の穴がともに彫られていないものがあり、さらに方形の柱を支えるための方形削込みが途中までしかあけられていないものがある（第 9 図 4）。やはり完成していない門があると考えざるを得ない（古代山城研究会 1996）。

4. 完成した古代山城と未完成の古代山城

城壁はできあがっていたか 以上、古代山城のいくつかの例を見てきたが、大野城跡・基肄城跡・金田城跡・鞠智城跡・鬼ノ城などのように城壁線が基本的に全周する、完成したと考えられる山城と、唐原

山城跡・阿志岐城跡・鹿毛馬神籠石・女山神籠石・おつぼ山神籠石・播磨城山城跡などのように城壁の一部、またはかなりの部分が築かれていない、未完成と考えざるを得ない山城が存在することを再確認した。

ただ、前者に関しても、すべて土塁などの城壁を築造していたのか、それとも急峻な自然地形の利用も含めて完成していると考えなのか、気になる点はあるが、基本的に城としての機能を維持できる城壁線の存在が推測できるものをひとまず完成したものと考えている。この明確な城壁線（土塁・石塁など）が確認できない部分に関しては、まったく何もせず、自然地形を利用しているのか、本来は土塁状のもの、または柵などの施設があるのかなどは今後検討が必要であろう。

また、未完成の山城においても、その城壁が確認できない部分が、まったくなんらの工事もししていないのか、城壁を築く途中であったのか、たとえば、山の斜面を加工し、石を並べる準備をし、土塁を作ろうとしていたのか、さらに、斜面加工の後、石をいくつか並べたが、土塁を作る前に止まってしまったのかなど、いろいろな様相が確認されている。このように、どのような状況で止まっているのかを確認することも、山城築造のあり方を考える上で大事な点であろう。

城内施設 古代山城研究においてよく取り上げられた城内施設の存在もこの完成・未完成と関わる可能性がある。つまり、城壁が完成し、兵士たちがその中で見張りや城の管理などを行っていたと考えるならば、当然それに関連する施設や建物群が必要となる。ただ、未完成の山城でも工事を進めるために作業小屋や石材切り出し場、石材加工のための道具である鑿などの加工場（鍛冶場）などは当然必要であったと推測される。しかしこれまで古代山城において内部施設が確認されている例はやはり少ない。

一方、城壁が全周しない未完成と考えられている山城においては、城壁が築かれている部分には門が築かれたもの（おつぼ山神籠石など）はあるが、城内施設に関してはほとんど確認されていない。いずれ築城工事に関わる掘立柱建物などが検出される可能性はあると思うが、完成後の管理棟や兵舎、そして倉庫などは全城を調査しても検出できないのかもしれない。

ただ、この「完成」も当初から、または築城途中の段階で急遽、これくらいの範囲に城壁さえ築けばよいとして、ひとまずの「完成」として、城内施設の造営に関わっているならば、そのような管理棟、倉庫などが今後発見される可能性は当然ある。

いろいろな未完成 いずれにせよ、「未完成」にもいろいろな段階があることがわかる。

まず、城壁がほとんど築かれていないと考えられる豊前唐原山城跡や播磨城山城跡などはやはり、築城の意志はあったが、なんらかの理由で工事が「初期段階」で止まらざるを得なかったと推測される。

筑前阿志岐城跡、筑前鹿毛馬神籠石、筑後女山神籠石、肥前おつぼ山神籠石などは官道などに面する部分だけが作られ、見えない部分については城壁が築かれていない。向井一雄のいう「見せる城」である（向井 2010b）。確かに見られることを意識して築いていると思われるが、おつぼ山神籠石のように見えない部分にも点的に列石用の石材が置かれているものがあるのも事実のようである。つまりこのような途中で工事が止まった城に関しても当初の目的を達したのでここで止めるという場合と、やはり工事は進めていたが、なんらかの理由で、途中で止めざるを得なかったと考えざるを得ないものもありそうである。

さらに石城山神籠石の唐居敷は未完成であり、門の建物工事段階で中止した、といえるのかもしれない。豊前御所ヶ谷神籠石の第2東門に関しても、もしかすると工事途中であったのかもしれない。

このように、「未完成」についても、「工事初期段階の未完成」「工事のある段階での意図的中止」、そして「工事は続けていたが、なんらかの理由で工事が中止になった未完成」など、いろいろありそうで

ある。

このような未完成のあり方は、それぞれの山城のもつ意味、たとえば築かれた場所・立地、つまり、もし同時期にいくつかの城を並行して造っていたのであるならば、その中での優先度が低かった可能性や、単にその地域でのなんらかの理由で築城工事が遅れ、そのまま中止となった可能性などが考えられることになる。完成した山城と未完成の山城のもつ意味、未完成の山城の中での工事進捗状況の違いの意味などいろいろと考える材料になりそうである。

完成した山城と未完成の山城 現時点で城壁が完全にめぐらされている完成した山城、完全に城壁はめぐっていないが、自然地形の利用を含めてほぼ完成していると考えられる山城は、筑前大野城跡、肥前基肄城跡、対馬金田城跡、肥後鞠智城跡などのいわゆる朝鮮式山城と、備中鬼ノ城、豊前御所ヶ谷神籠石などの神籠石系山城、計6カ所である。

一方、確実に未完成、またはおそらく未完成と推測されるものが、豊前唐原山城跡、筑前阿志岐城跡・鹿毛馬神籠石・杷木神籠石、筑後女山神籠石、肥前おつぼ山神籠石、周防石城山神籠石、讃岐城山城跡、播磨城山城跡など9カ所ある。

このように、おおよその概要がわかる古代山城22カ所のうち、6カ所が完成している可能性が推測され、9カ所が未完成の可能性が高いことがわかった。

『日本書紀』などに記されたいわゆる朝鮮式山城ではその所在地が確認されている6カ所のうち4カ所が完成しており、城壁線がわからない高安城は何とも言い難いが、讃岐屋嶋城はひとまず厳しい崖や急傾斜の部分は自然地形を利用していた可能性は考えられる。ただ、屋嶋城跡に関しては、頂上部の城壁線とは別に、西側中腹に浦生の石塁と呼ばれている石塁がある。最近の調査で古代のものである可能性が高まり、その実態把握調査が進められているが、その北側に位置する雉城と推測される部分の北側城壁線がよくわからない。もしこの石塁が屋嶋城跡に伴うものであるならば、この部分は未完成である可能性がある。そうすると、雉城の北側に城壁線が伸びないこれ自体を完成品とみるのか、頂上部は完成しているが、この石塁部分は未完成であるのか、さらに、頂上部も工事途中であるのかなど、いろいろと興味深い疑問が生まれてくる。いずれにせよ朝鮮式山城に関しては、実態のよくわからない高安城を除くと基本的に完成していると考えて良いのかもしれない。

一方、神籠石系山城に関しては、ほぼ確実に完成しているのではないかと推測されるものは鬼ノ城と御所ヶ谷神籠石のみである。山城の場合、すべての城壁、城内の施設を把握することは極めて難しい。現時点では神籠石系山城に関しては、完成したものは比較的少なそうで、未完成または途中で工事が止まったものの方が多そうであると言えそうである。

このように神籠石系山城に未完成のものが多くという意識で古代山城全体を見てみると、以前から検討されてきた築城時期の問題に関しては、朝鮮式山城より古い城で未熟であったため工事が止まったという考えも成立するように思われるし、逆に7世紀末頃に築城が始まり、すぐに城が不必要になったため、工事を停止したとも考えられ、やはり答えは簡単には出そうにない。

そして、朝鮮式山城と神籠石系山城を併せて、完成した城の分布を見ると、667年の対馬金田城、665年の大野城・基肄城、そしてほぼその頃に築城されたと推測される肥後鞠智城が大宰府地域を中心に北と南を意識して築かれていることがまずわかり、そして豊前御所ヶ谷神籠石と備中鬼ノ城、さらに667年の屋嶋城、場所は未確認であるが665年の長門城の位置を考えると、これらが一連の唐・新羅からの攻撃を意識して築城したものではないかと推測されるのである。これに備前大廻小廻山城を加えれば、当時の防衛線として対馬から北部九州・中九州、そして瀬戸内海沿岸地域のこれら山城が築かれた場所

が当然のことながら重視されていたといえるのではないであろうか。

またこのように見てくると、ただ、文献に記録がないということでひとまずひとまとめにしている神籠石系山城も完成した可能性が高い鬼ノ城や御所ヶ谷神籠石と明らかに未完成と考えられる城とで、そのほかの特徴もあわせ検討すると区分することができるかもしれない。少なくとも鬼ノ城に関しては、以前から述べているように懸門構造・門床面の石敷き・雉城の存在などの特徴は667年の対馬金田城や讃岐屋嶋城と類似しており、その造営時期が近いのではないかと考えられる（亀田2009）。

繕治（修理・修築・改修） 最後に、完成したと考えられている大野城・基肆城・鞠智城には文武天皇2（698）年の繕治（修繕）記事がある。この「繕治」については、ひとまず城が完成し、その後建物や城壁などが時間とともに傷み、建て替え、または修繕しなければならないなどの理由から繕治したと考えられるが、一方で未だ工事途中で土砂崩れや地震などによって城壁などが壊れ、それを修築したのかもしれない。また、それらとともに、これまで多くの諸先学が述べてこられたように、掘立柱建物から礎石建物に建て替えたことを示しているのかもしれない。それは単に立て替えだけではなく、機能の変化を含んでの繕治かもしれない。

いずれにせよ、これらの3つの城はこの記録とともに出土遺物、土器や瓦によっても7世紀末～8世紀初め頃になんらかの行為が行われた（繕治された）と考えられている（第1、2、4図）。土器の場合は使用年代の幅の問題があり、細かく区切ることはできないが、量的な検討を行えば、ある程度の変遷を押さえることができる。大野城跡や基肆城跡では残念ながら、そのような量的な処理は未だされていないようであるが、鞠智城跡では木村龍生によってその検討がなされている（第4図5、木村2012）。

木村の成果によれば、まず築城以前の6世紀後半代からの土器がみられ、このころからのちの城内に人々が住んでいたことがわかり、鞠智城築城期の7世紀第3四半期に土器が少し増加し、文武天皇2（698）年の繕治記事に対応する可能性がある7世紀第4四半期～8世紀第1四半期の土器が急増していること、そして興味深いことに8世紀代2四半期と第3四半期の土器がなく、次に8世紀第4四半期の土器が比較的出土し、その後再び9世紀第1四半期・第2四半期の土器がほとんどなくなり、9世紀代3四半期に急増し、第4四半期まで続くことが明らかにされている。この土器の量的変遷は7世紀後半～8世紀初め頃と推測される平行文や格子目文瓦の量、そして8世紀末頃と推測される縄目文瓦の存在などとうまく合致しており、『続日本紀』などの記録とも対比できるのではないかと思われる。

そこでこのような繕治記事がある3つの城とそうではない城を比較してみると明らかになるものがありそうである。例えば、対馬金田城跡では大野城跡や鞠智城跡ほどではないが、調査も進められ、城内施設も明らかになっている。そこで興味深い点は土器などの遺物が現時点での成果であるが、基本的に8世紀初めまで下がりそうなものがほとんどなさそうであることと、礎石建物が確認されていない点である（第3図）。「未確認である」ということはいずれ発見される可能性が当然あり、そう簡単に「ない」とは当然いえないのであるが、これまでの調査ではないようである。いずれ城内の全域を調査する中で礎石建物や8世紀以降の土器や瓦などが発見される可能性は当然あるのであるが、『日本書紀』の天智天皇在位中に築城された九州の城（確認されているもの）で繕治記事がないのはこの金田城だけである。記録は当然なんらかの理由で記されないこともあるので、「ない」ということを強調することは問題であるが、現時点での遺構と遺物に関する成果を積極的に評価すると、この繕治記事が見られないことに意味を認めて良いのかもしれない。

ただ、一方で、城内のビングシ地区の土塁に関しては、上下2層が確認されており、その上層土塁に伴う門礎石の形が外郭線石塁の門礎石と同じグループのものである（第3図2）。このあり方をどのよう

に理解すべきか難しいが、この改修を記録はないが、698年のほかの城における繕治記事と関連させることもできるかもしれない。しかし礎石建物や瓦がないことなどを積極的に評価するならば、やはり記録に記された698年の3城繕治と金田城の考古学的に確認されている土塁の改修は別のものと理解すべきなのかもしれない。たとえば698年以前にこの城だけが改修されたのか、それとも667年の築城以前にすでに一部城壁が築かれていたのかなどである。

いずれにせよ、城の繕治はその城の重要性、少なくとも改修して維持・使用しなければならない、という可能性を示しており、城が完成している、と同じくらいの意味を持っているものと推測される。つまり文献史料・考古学的成果、いずれにおいても繕治・改修の痕跡が確認できる城は重要な城であったことを推測させるのではないであろうか。つまり、繕治・修理・改修などの痕跡も山城研究に役立つものと推測されるのである。

また、『日本書紀』などの記録に記されていないいわゆる神籠石系山城においても、発掘調査がそれなりに進んでいる城であれば、やはりそれなりに遺構や遺物は確認されている。備中鬼ノ城はその代表的な例であり、遺構と遺物の総合的な検討によって城の使用期間や使用状況が明らかにされつつある（金田・岡本 2013、p. 174）。特に鬼ノ城西門南東側の石垣部分では修繕の可能性が推測され（第5図2）、城内遺物の量的な変化（7世紀第3四半期の遺物は少なく、第4四半期～8世紀第1四半期頃の遺物が多い）は鞠智城跡における土器の量的な変化と対応しているようにも思え、鬼ノ城における築造とその後の修理を含めた維持管理が推測できるのではないであろうか。このようにある程度の遺物・遺構が確認できている城であるならば、それらを総合的に検討することによってより正確な城の変遷が明らかになるのではないかと推測される。

逆に言うとやはり神籠石系山城では遺物はあまり出土しておらず、遺構もよくわかっていない。このように、以前から神籠石系山城の特徴としてあげられていた「遺構がわからない」ということは、「城が未完成であった、工事途中で止まってしまった、また長期間使用されなかった」などのことがらを示しているのかもしれない。

5. おわりに

以上、古代山城は完成していたのか、未完成であったのか、という視点からいくつかの古代山城をみてきた。その結果として完成、またはほぼ完成したと考えられるものは、『日本書紀』などの記録に記されたいわゆる朝鮮式山城では6遺跡中4遺跡の大野城・基肆城・金田城・鞠智城、そして記録の見られないいわゆる神籠石系山城では16遺跡中、鬼ノ城と御所ヶ谷神籠石の2遺跡のみであり、逆に未完成と推測されるものは朝鮮式山城では現時点ではよくわからず、神籠石系山城では16遺跡中、唐原山城跡・阿志岐城跡・鹿毛馬神籠石・女山神籠石・おつぼ山神籠石・播磨城山城跡など6遺跡以上ある。

このような記録に記された山城と記されなかった山城の完成・未完成を合わせ検討してみると、完成した山城群の意味、また未完成の山城群の意味が多少見えそうである。

まず、完成した山城の場所はそれぞれの地域の中で重要な場所であることが改めてわかる。そしてやはり記録にもあるように古い段階から築城され始めたのではないかと推測される。

未完成の山城は、意図的な未完成なのか、それとも否応なしの未完成なのか。「見せる城」という意識は当然存在したと思われる。ただ、それによって当初から、たとえば一部しか作ることを考えなかったのか、工程の関係で停止し、そのままになったのか。そしてこれらの「未完成」、「途中での停止」は単なる偶然ではなく、当時の政治・社会情勢を反映したものではないかと考えられる。

完成と未完成、未完成の諸段階、遺構の有無・多寡、遺物の多寡、これらのもつ意味をさらに検討していくとなにか新しい古代山城研究の方向性が見えるのではないかと期待している。

そして、「大野城・基肆城・鞠智城」の698年の繕治記事は城が維持管理されている、この時期に繕治しなければならないなどの国家の意識を反映していると推測され、ほかの城との重要性や性格の違いなどを示していると考えられ、「繕治」は意味を持っていると思われる。そのような意味で、鬼ノ城城壁の修理の可能性はこの城の重要性を示しているということができるのではないであろうか。

以上のように考えてくると、諸先学がすでに述べてこられた「未完成」という考えも改めて整理検討することで、新たな視点が見えてきそうである。「完成」「未完成」、そして「繕治」が古代山城研究のキーワードの一つになるのではないかとと思われる。

〈注〉

(1)古代山城の文献史料については、鈴木 2011などを参照した。

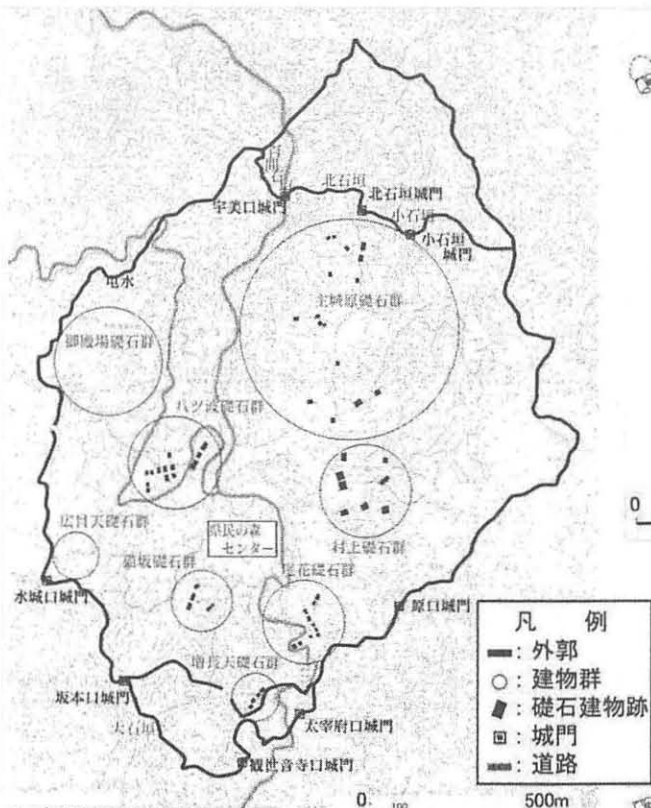
〈引用・参考文献〉

- 石松好雄 1976「女山神籠石」『考古学ジャーナル』117、ニューサイエンス社
石松好雄 1992「大野城」『太宰府市史考古資料編』太宰府市史編集委員会
磯村幸男 1978『史跡女山神籠石保存管理計画策定報告書』瀬高町教育委員会
井上裕弘・宮小路賀宏 1984『鹿毛馬神籠石』颯田町教育委員会
入佐友一郎・小澤佳憲編 2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』福岡県教育委員会
大野城市教育委員会 2010『古代山城サミット』
岡田博・亀山行雄 2006『国指定史跡鬼城山』岡山県教育委員会
小川秀樹 2006『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅰ』行橋市教育委員会
小川秀樹 2010「豊前・御所ヶ谷山城」『古代文化』62・Ⅱ、古代学協会
小田富士雄編 1983『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書 10、名著出版
小田富士雄編 1985『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書 13、名著出版
小田富士雄 1997「西日本古代山城に関する最近の調査成果ー特に朝鮮式山城についてー」『古文化談叢』37
小田富士雄 2009「第3編 第2章 第3節 基肆城跡の築城」『基山町史』上巻、基山町史編さん委員会
小田富士雄 2011「基肆城跡」『基山町史』資料編、基山町史編さん委員会
小野忠熙 1983「石城山神籠石」小田富士雄編『北九州瀬戸内の古代山城』名著出版
鏡山猛 1968『太宰府都城の研究』風間書房
鏡山猛ほか 1965『おつぼ山神籠石』佐賀県教育委員会
加藤史郎ほか 1988『城山城』新宮町教育委員会
加藤史郎 1995「播磨・城山」『古代文化』47・11、古代学協会
金田善敬・岡本泰典編 2013『史跡鬼城山2』岡山県教育委員会
亀田修一 2009「鬼ノ城と朝鮮半島」岡山理科大学『岡山学』研究会『鬼ノ城と吉備津神社ー「桃太郎の舞台」を科学する』吉備人出版
亀田修一 2012「対馬金田城小考」『百済と周辺世界』成周鐸教授追慕論叢刊行委員会
川述昭人編 1982『女山・山内古墳群』瀬高町教育委員会
木村龍生 2012「第Ⅵ章 第1節 (1) 鞠智城跡出土の土器について」西住ほか 2012『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会
九州歴史資料館 1987『大宰府史跡昭和 61 年度発掘調査概報』
草場啓一編 2008『阿志岐城跡ー阿志岐城跡確認調査報告書 (旧称 宮地岳古代山城跡)』筑紫野市教育委員会
草場啓一編 2011『阿志岐城跡Ⅱー阿志岐城跡確認調査報告書総括編』筑紫野市教育委員会
古代山城研究会 1996「讃岐城山城跡の研究」『溝渡』6
古代山城サミット実行委員会 2010『古代山城サミット展示会 あつまれ!!古代山城』
佐田茂 1982「神籠石系山城の再検討」森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会編『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
猿渡真弓 2013『女山神籠石』みやま市教育委員会
島津義昭編 1983『鞠智城跡』熊本県教育委員会
末永浩一 2003『唐原神籠石Ⅰ』大平村教育委員会

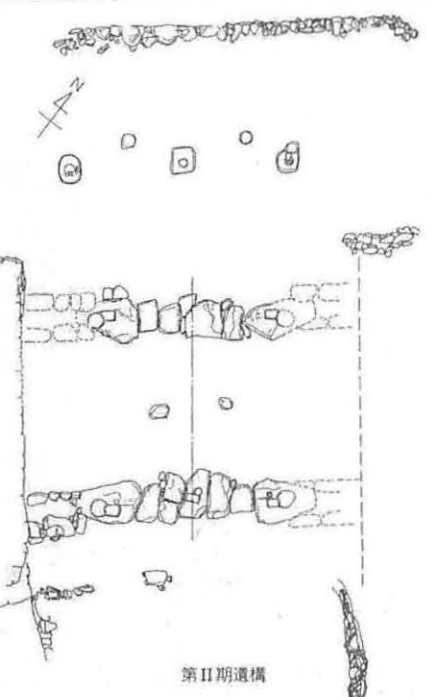
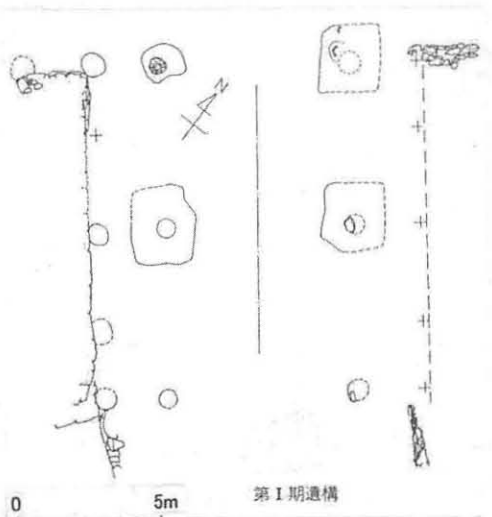
末永浩一 2005『唐原山城跡Ⅱ』大平村教育委員会
 鈴木拓也 2010「軍制史からみた古代山城」『古代文化』61-4、古代学協会
 鈴木拓也 2011「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』26、条里制・古代都市研究会
 須原緑 1998『国指定史跡鹿毛馬神籠石』瀬田町教育委員会
 武雄市教育委員会 2011『史跡おつぼ山神籠石保存管理計画書』
 田中淳也・古門雅高編 2000『金田城跡』美津島町教育委員会
 田中淳也・古門雅高編 2003『古代朝鮮式山城金田城跡Ⅱ』美津島町教育委員会
 田中淳也編 2008『古代山城特別史跡金田城跡Ⅲ』対馬市教育委員会
 田中淳也編 2011『古代山城特別史跡金田城跡Ⅳ』対馬市教育委員会
 田平徳栄 1983「基肆城考」九州歴史資料館編『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢』上、吉川弘文館
 出宮徳尚・乗岡実 1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
 西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第8～32次調査報告－』熊本県教育委員会
 原田大六 1959「神籠石の諸問題」『考古学研究』6—3、考古学研究会
 光市教育委員会 2011『史跡石城山神籠石保存管理計画策定報告書』
 正木茂樹編 2010『鬼ノ城～謎の古代山城～』岡山県立博物館
 松尾洋平・谷山雅彦 2006『古代山城鬼ノ城 2』総社市教育委員会
 松村一良 1990「『日本書紀』天武七年条にみえる地震と上津土壘跡について」『九州史学』98、九州史学会
 松村一良 1994「高良山神籠石」『久留米市史 第12巻資料編（考古）』久留米市史編さん委員会
 松本豊胤 1976「城山」『考古学ジャーナル』117、ニュー・サイエンス社
 宮小路賀宏ほか 1970『杷木神籠石』杷木町教育委員会
 宮小路賀宏・亀田修一 1987「神籠石論争」『論争・学説日本の考古学 6 歴史時代』雄山閣
 向井一雄 1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』27、地域相研究会
 向井一雄 2004「IX-2 山城・神籠石」『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』奈良文化財研究所
 向井一雄 2009「日本の古代山城研究の成果と課題」『溝渚』14 古代山城研究会
 向井一雄 2010a「古代山城研究の最前線－近年の調査成果からみた新古代山城像－」『季刊邪馬台国』105
 向井一雄 2010b「駅路からみた山城－見せる山城論序説－」『月刊地図中心』453、(財)日本地図センター
 村上幸雄 1998「鬼ノ城 南門跡ほかの調査」総社市教育委員会『総社市埋蔵文化財調査年報』8
 村上幸雄・松尾洋平 2005『古代山城鬼ノ城』総社市教育委員会
 山口裕平 2003「西日本における古代山城の城門について」『古文化談叢』50(上)、九州古文化研究会
 山元敏裕編 2003『史跡天然記念物屋島』高松市教育委員会
 山元敏裕編 2008『屋嶋城跡Ⅱ』高松市教育委員会
 横田義章・芳沢要 1979『特別史跡大野城跡Ⅲ』福岡県教育委員会
 横田義章 1991『特別史跡大野城跡Ⅶ』福岡県教育委員会
 渡邊芳貴・半沢直也 2005『永納山城跡』西条市教育委員会
 渡邊芳貴編 2009『史永納山城跡Ⅰ』西条市教育委員会
 渡邊芳貴 2012『史跡永納山城跡Ⅱ』西条市教育委員会

〈挿図出典〉(いずれも一部改変引用)

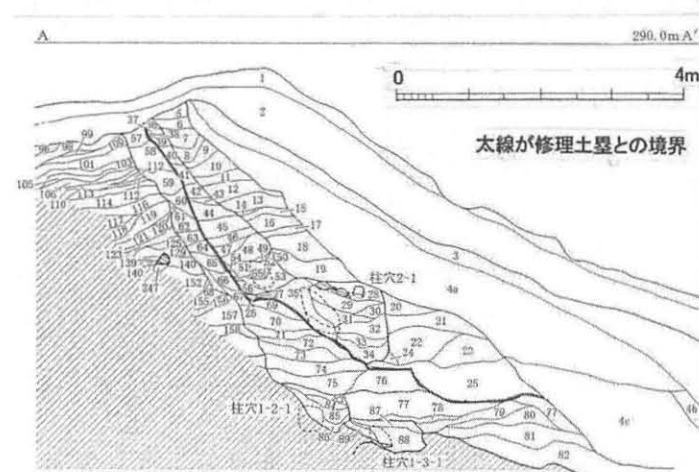
第1図1：古代山城サミット実行委員会 2010、2：横田 1991、3：入佐・小澤編 2010、4：横田・芳沢 1979
 第2図1：古代山城サミット実行委員会 2010、2～4：小田 2011
 第3図1：小田 1997、2・3：田中・古門編 2000
 第4図1～5：西住・矢野・木村編 2012
 第5図1：古代山城サミット実行委員会 2010、2：村上・松尾 2005、3：金田・岡本編 2013
 第6図全体図：小川 2010、出土土器：小川 2006
 第7図：松本 1976
 第8図1、2、8：古代山城サミット実行委員会 2010、3、4：向井 2010b、5：武雄市教育委員会 2011、6：加藤 1995、7：小野 1983
 第9図讃岐城山城（下）以外：村上 1998、讃岐城山城（下）：古代山城研究会 1996



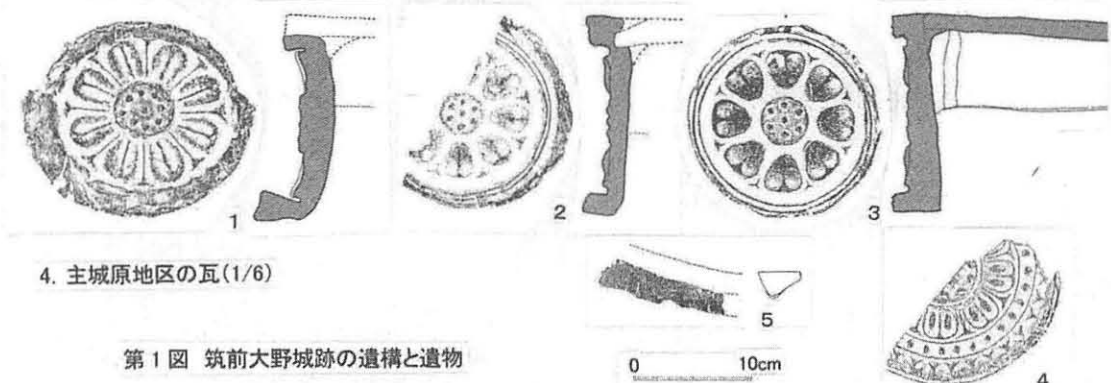
1. 大野城跡全体図(1/20000)



2. 太宰府口城門(1/250)

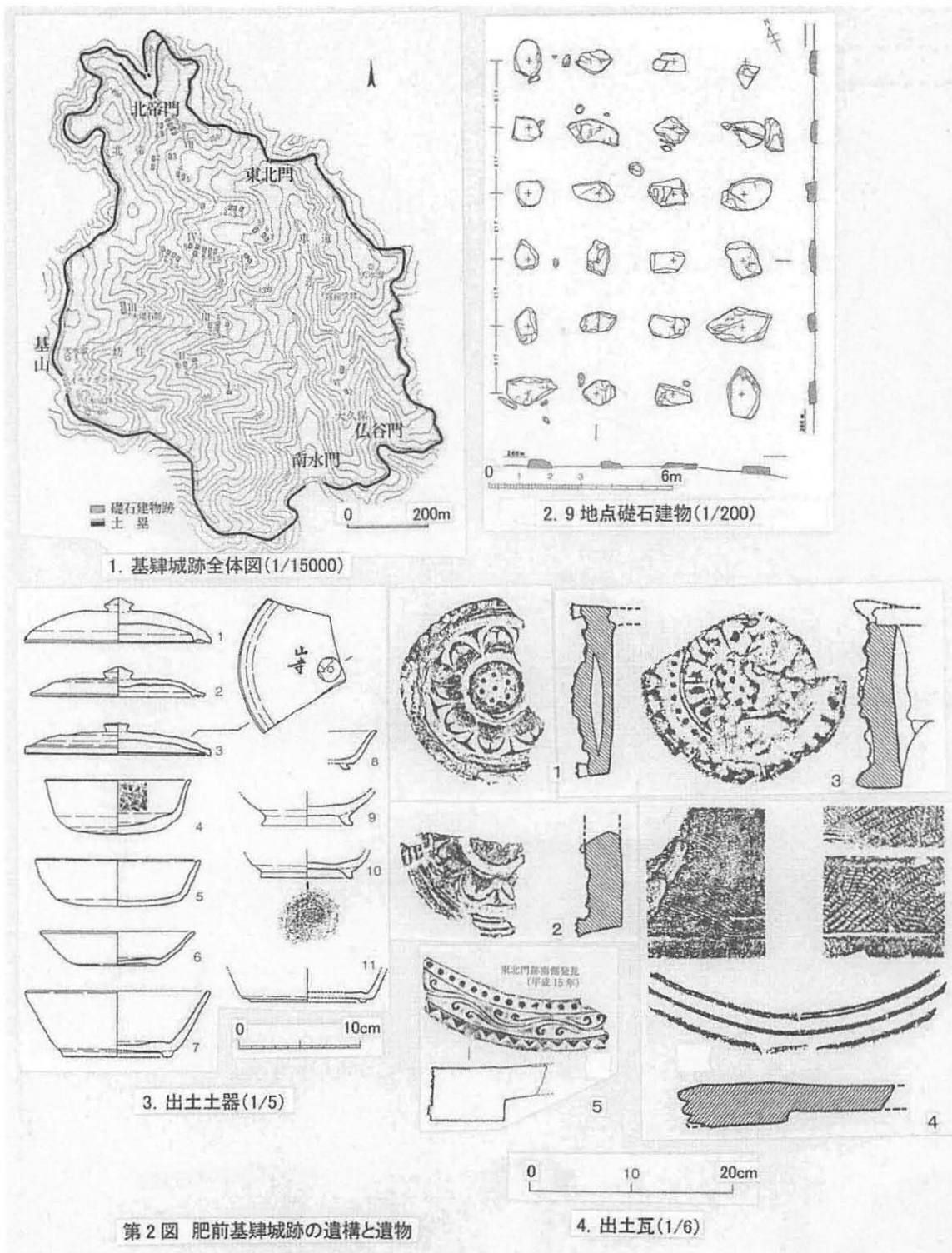


3. 小石垣地区大谷東方土塁 B 地区土塁積み直し状況 (1/100)



4. 主城原地区の瓦(1/6)

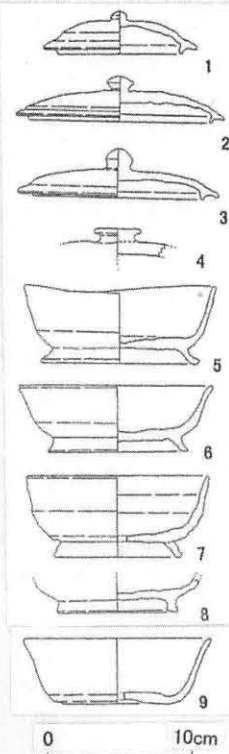
第1図 筑前大野城跡の遺構と遺物



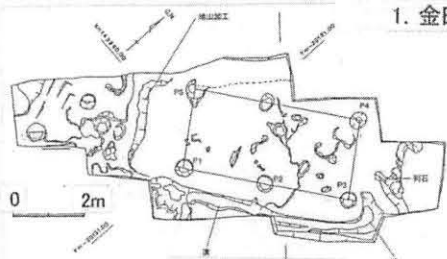
第2図 肥前基肄城跡の遺構と遺物

4. 出土瓦(1/6)

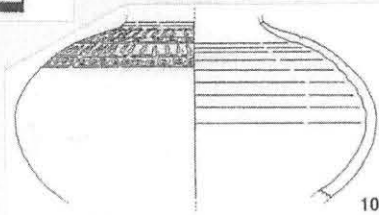
金田城跡



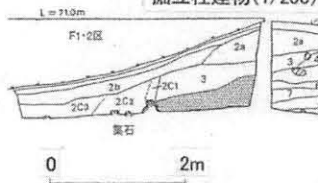
1. 金田城跡全体図(1/15000)



掘立柱建物(1/200)

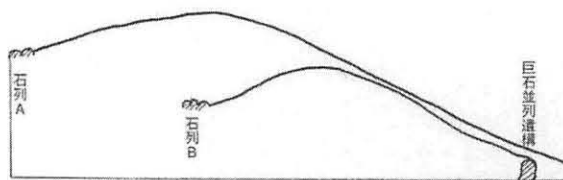


3. 出土土器(1/5)



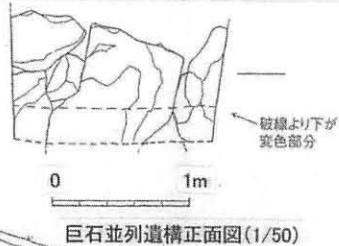
- | | |
|-------------|----------------|
| 第1層 黄土、褐色土 | 第10層 暗黄褐色粘質土層 |
| 第2層 淡黄灰褐色土層 | 第11層 淡赤褐色粘質土層 |
| 第3層 淡黄褐色土層 | 第12層 灰黄褐色粘質土層 |
| 第4層 白黄色土 | 第13層 暗灰黄褐色粘質土層 |
| 第5層 赤褐色粘質土 | 第14層 暗赤褐色粘質土層 |
| 第6層 黄褐色土 | 第15層 黄灰色砂質土 |
| 第7層 赤褐色砂質土 | 第16層 灰黄色粘質土 |
| 第8層 赤褐色泥礫土層 | 第17層 明黄褐色粘質土 |
| 第9層 黄褐色粘質土層 | 第18層 白黄土 |

南土壘断面図(1/100)

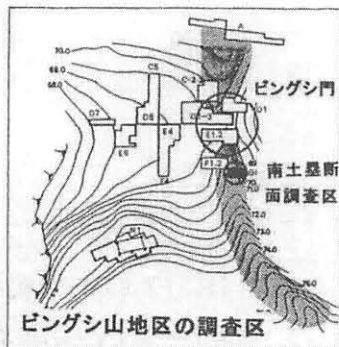


土壘概念図

2. ビングシ山地区の遺構

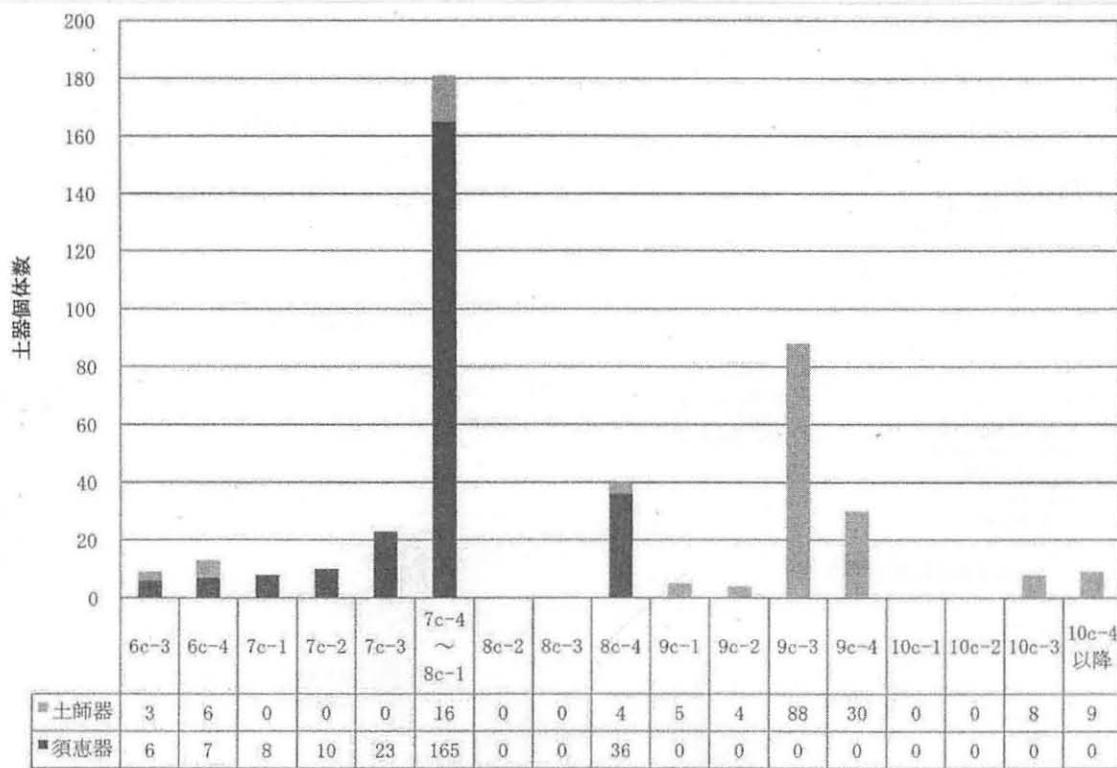
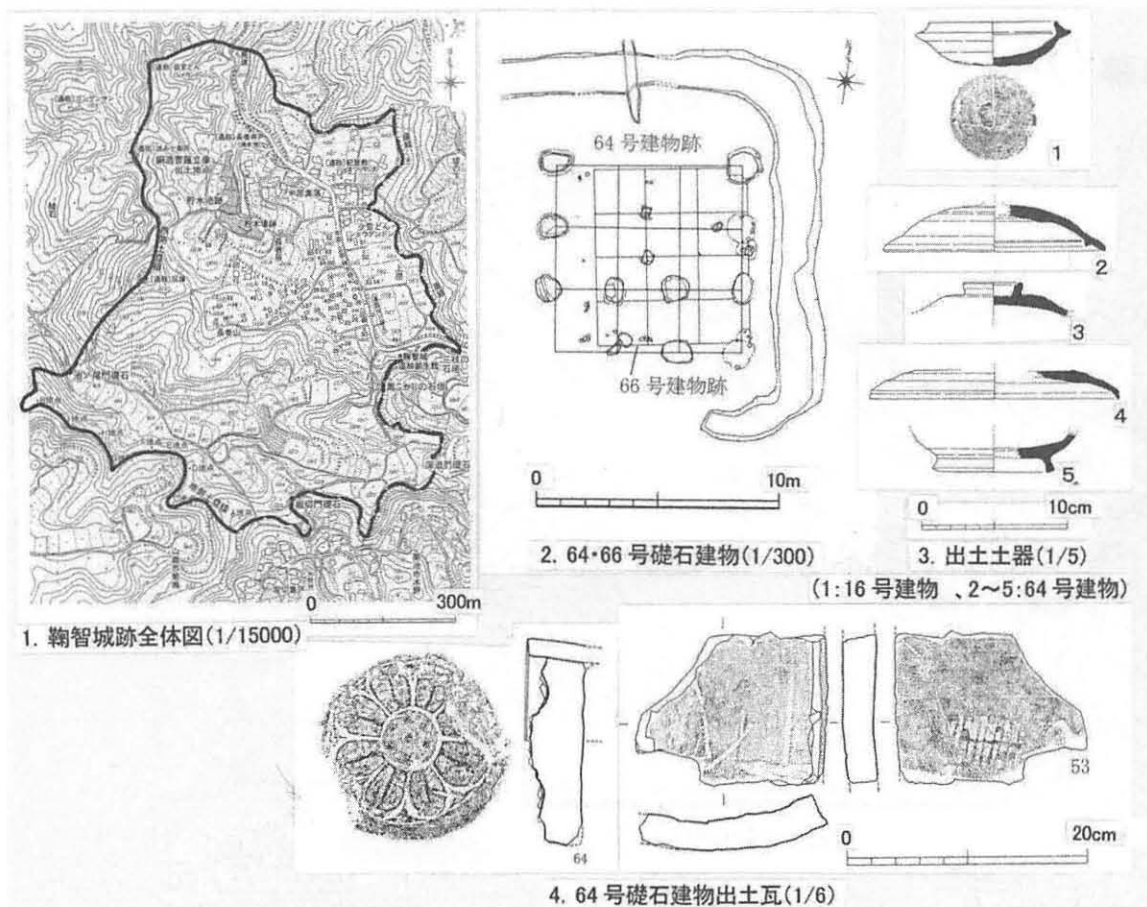


巨石並列遺構正面図(1/50)



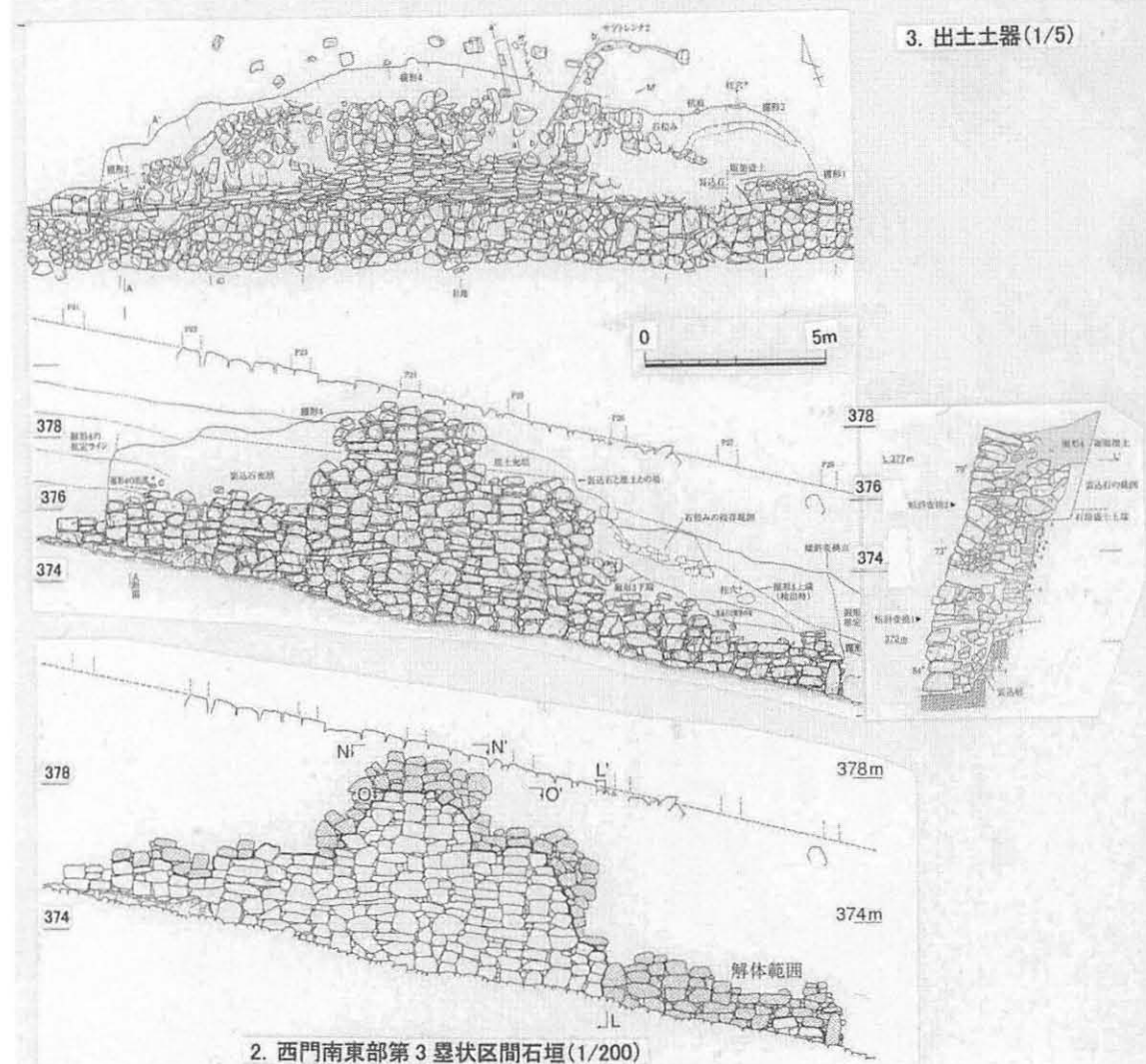
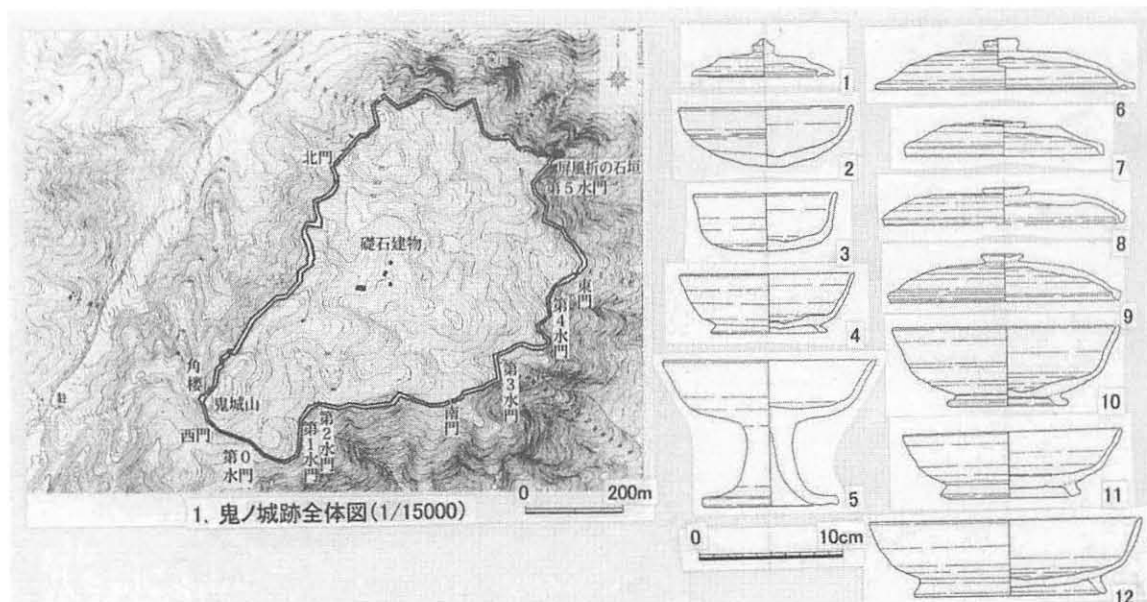
ビングシ山地区の調査区

第3図 対馬金田城跡の遺構と遺物

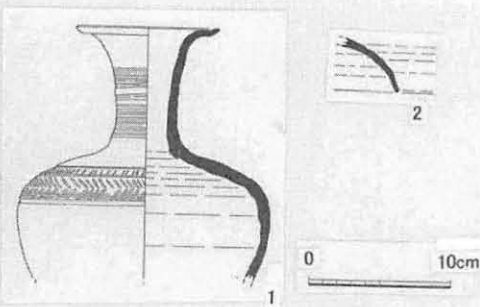


5. 鞠智城跡出土土器の時期別数量比較図

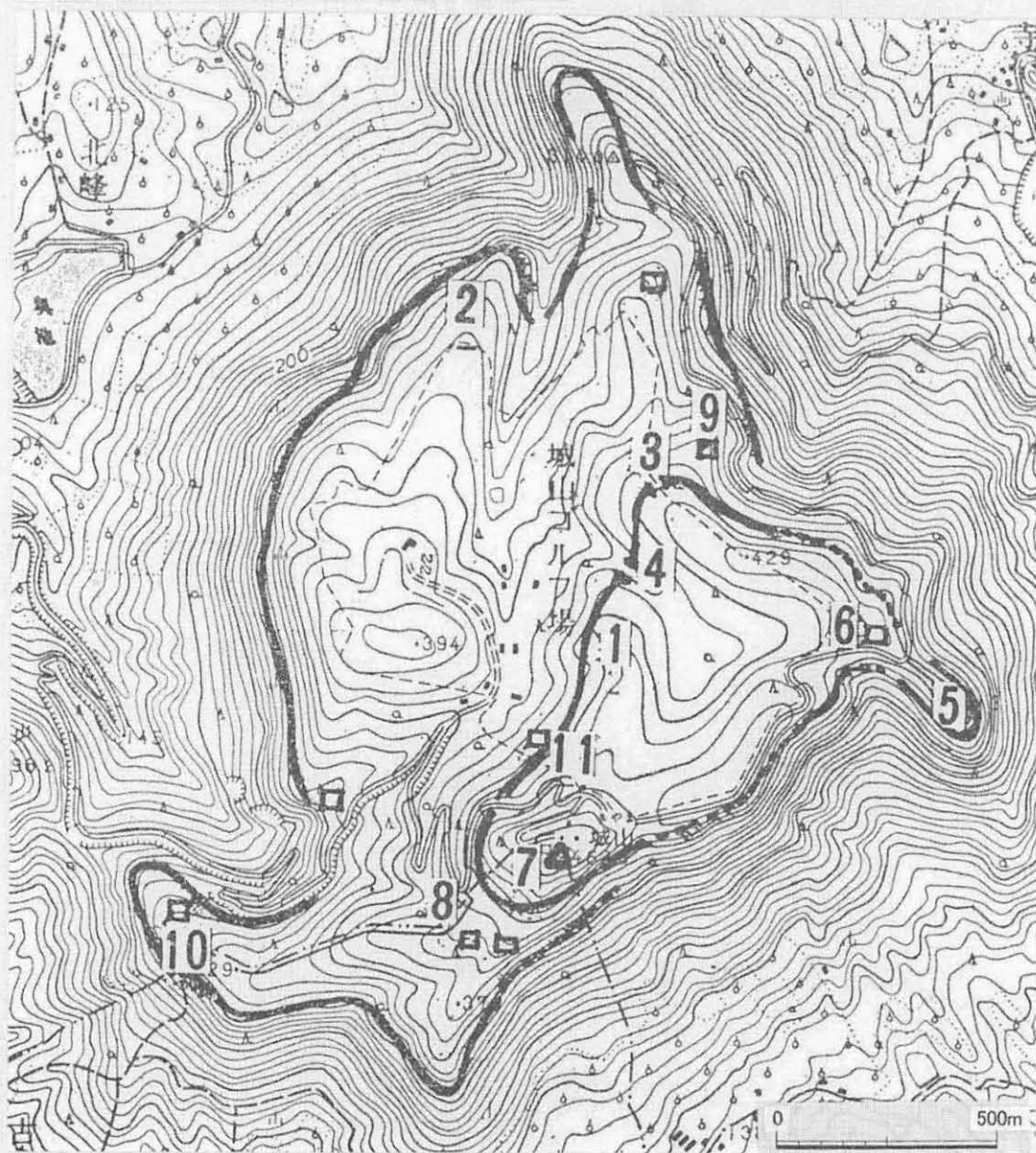
第4図 肥後鞠智城跡の遺構と遺物



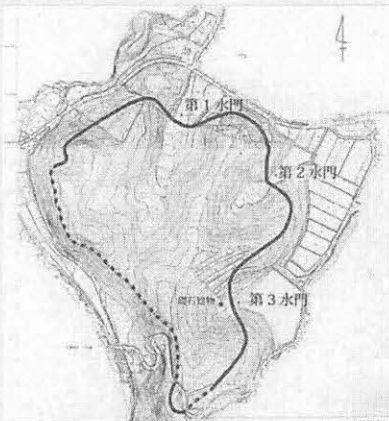
第5図 備中鬼ノ城跡の遺構と遺物



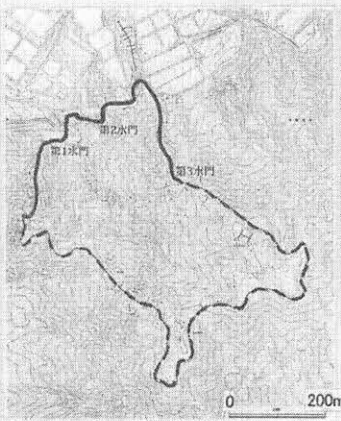
第6図 豊前御所ヶ谷神籠石の全体図(1/15000)と
出土遺物(1/5)



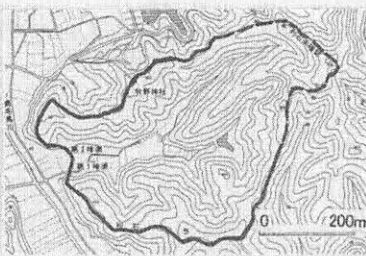
第7図 讀岐城山城跡(1/15000)



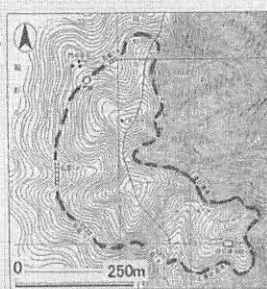
1. 豊前唐原山城跡



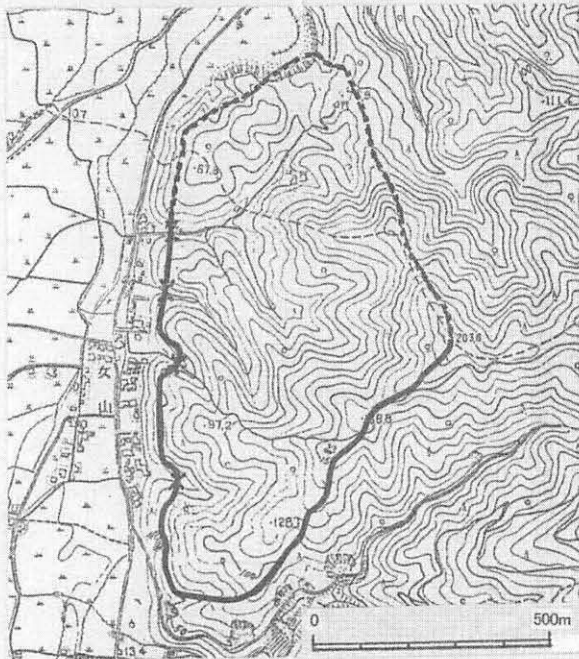
2. 筑前阿志岐城跡



3. 鹿毛馬神籠石



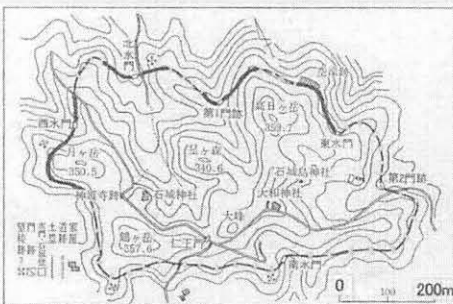
6. 播磨城山城跡



4. 筑後女山神籠石



5. 肥前おつぼ山神籠石



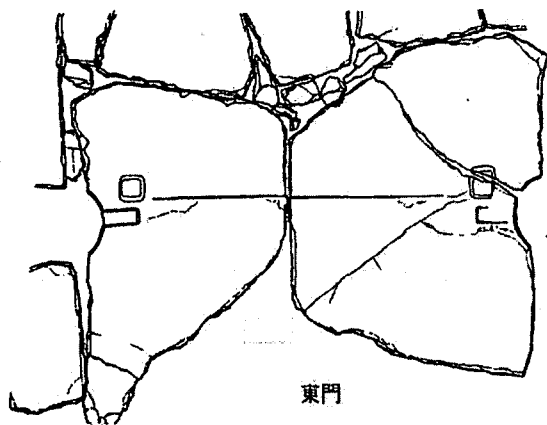
7. 周防石城山神籠石



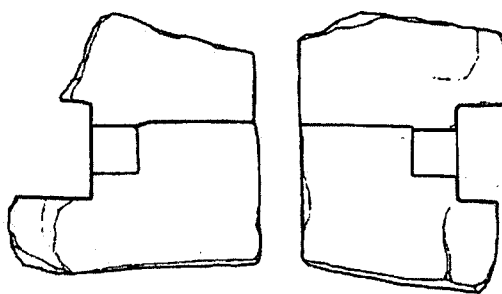
8. 筑後高良山神籠石

第8図 未完成の古代山城

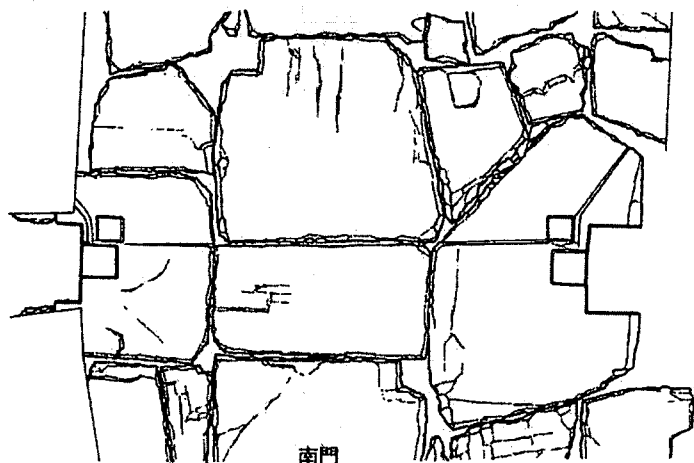
(1/15000、おつぼ山神籠石のみ 1/10000)



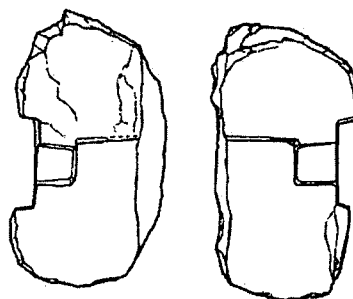
東門



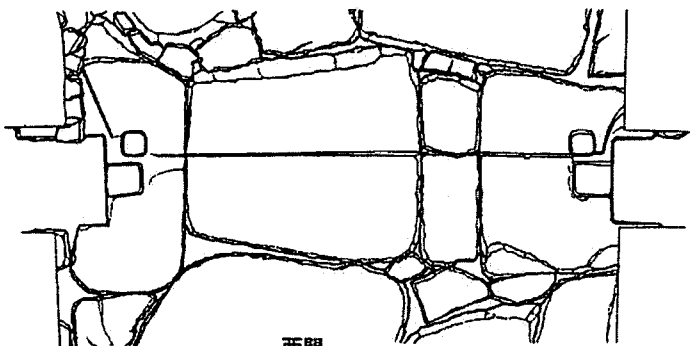
2. 播磨城山城跡



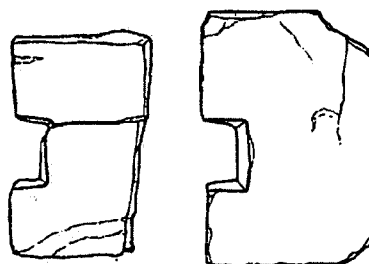
南門



3. 周防石城山神籠石



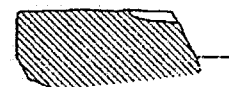
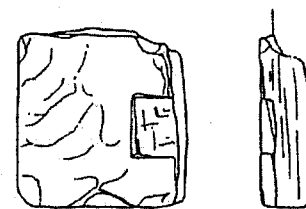
西門



1. 備中鬼ノ城



第9図 瀬戸内海沿岸地域古代山城の唐居敷(1/50)



4. 讃岐城山城跡